

資料3 讃美歌494番「わが行く道いついかに」選曲の経緯

今回の讃美歌は、『栄光、神にあれ ―讃美歌物語』梅染信夫著を読まれたH.Nさんが、「この讃美歌によって励まされながら人生を送っている人がいるという事をご紹介したい」との思いで選曲して下さいました。なお、タイトル「一片の紙の成す業」はH.Nさんが付けて下さいました。感謝と共にご紹介いたします。



讃美歌494番「わが行く道いついかに」

一片の紙の成す業

讃美歌 494 番と出会って「ゆくべき道を示された」人の話をします。

その人は旧姓の中学で退学処分を受け、丁稚奉公をしていたのですが、それが荒仕事だったので始終怪我をしていました。ある日、薬局でメンソレータムを買って、何気なくその箱を開けてみると、中に一枚の紙切れが入っていて、それにこう書いてありました。

「この薬であなたの傷を多分お治しできるでしょう。けれどももしあなたの心に何か悩みごとがありましたら、それはだれがお直して下さるでしょうか。それを知りたいとお思いでしたらすぐこちらへお便り下さい。……近江兄弟社」

その人はこれを読んでこう感じました。

＜これは、私の胸に突き刺さった刃でありました。退学処分を受けなければならぬほどの不良少年だったのに、全く悔い改めようとしなかった私をして、ぐさっと刃をこの胸に突き刺して下さった「神の愛の鞭」だったことに気付かされたのでした。＞

その人はその後、近江兄弟社の指導で大阪新生会という通信伝道の会員となり、ある日、日本基督教会大阪北教会で開かれた集会に出席してこの讃美歌「わが行く道」に出会ったのです。

＜その会合で、集まった全員が歌った讃美歌が、今も私の脳裏に鮮やかに刻み付けられています。この讃美歌を歌いつつ私の頬から涙がとめどなく流れ落ちたのを、私は今も覚えております。神様が、私の重い罪をお許し下さり、そして私の歩みゆくべき道をお示し下さった、と受け止めることが出来ました。＞

3年後のクリスマスにこの人は洗礼を受け、今日に至っています。

＜正直なところ、現在私の身边は相当厳しい状況に立たされております。どうしてこの難局を切り開けるだろうかと、と日夜祈っております。また、病身の家内を抱え、彼女の入院中はやむなく独り暮らしの難渋もつぶさに味わいました。それでも、定められた重荷は神様も減らしては下さりません。しかも、私の口からは一言も呟きを漏らさないように守って下さっております。聖霊の神にひとえに感謝しなければならない私です。――最初の会合での讃美歌が今もお嬉しくてたまらない思いで、今日もまた歌い続けております。＞

引用出典：「栄光、神にあれ」讃美歌物語、梅染信夫著 新教出版社、1994年発行